

平成28年度 鳴門渦潮高等学校学校評価

1 本校の教育目標

教育基本法の趣旨に則り、個人の尊厳と人権を尊重するとともに、校訓「自主・至誠・躍進」の精神のもと、社会の変化に主体的・創造的に対応できる能力を身につけた、心豊かなたくましい人材を育成する。

2 学校経営方針

- 一人ひとりの個性や可能性を最大限伸ばす教育の推進、進路指導の充実を図る。
- すべての教育活動を通じて人権尊重の精神を養い、相手の立場に立って行動できる優しさや、豊かな人間性の育成を図る。
- キャリア教育の充実を図り、勤労意欲を高めるとともに、規範意識を身につけた生徒の育成を図る。
- スポーツ科学科と総合学科の特性を活かした、ボランティア活動、文化活動、スポーツ活動、国際交流を推進し、地域に貢献できる生徒の育成を図る。
- 地域に信頼される学校として、教職員の資質向上と開かれた学校づくりに努める。

3 本年度の重点目標

- 生徒指導の充実
 - ①他人を思いやる優しさや豊かな人間性の育成に努める。
 - ②社会のルールや校則を厳守させ、規範意識の向上を図る。
 - ③生徒理解を深め、個に応じた生徒指導に努める。
- 環境教育・安全教育の推進
 - ①生命を尊重し、心身の健康と、環境問題への意識の高揚をはかり、自他の安全を守る能力を育成する。
 - ②校内の美化に努め、情操豊かな学校環境づくりに努める。
 - ③防災・減災教育を推進し、地域防災の即戦力及び将来の担い手を育成する。
- 特別活動の推進
 - ①ホームルーム活動・生徒会活動や学校行事を活性化させ、自主性や実践的な態度を育成する。
 - ②部活動を推進し、スポーツ活動において質の高い専門教育を行い、競技力の向上を図るとともに、スポーツ振興に寄与する人材を育成する。
 - ③ボランティア活動を積極的に行い、豊かな人間性を育てる。
- 学習指導の充実
 - ①基礎的・基本的な事項の指導を徹底し、基礎学力の向上定着を図る。
 - ②幅広い選択科目を設定し、生徒一人ひとりの興味・関心・進路に応じた履修指導を推進する。
 - ③生徒の学習意欲を引き出す指導体制・指導方法の工夫・改善を図る。
- 進路指導の徹底
 - ①生徒一人ひとりの学力や適性などを的確に把握し、個に応じたきめ細かな指導を徹底する。
 - ②スポーツ科学科・総合学科の特性を考慮したキャリア教育を推進する。
 - ③進路設計や進路選択に必要な情報提供を組織的・計画的に行い、生徒一人ひとりの勤労観・職業観の育成を図る。
- 人権教育の推進
 - ①学校の教育活動を通して人権尊重の教育・道徳教育を展開する。
 - ②地域や家庭と連携した人権教育を推進する。
 - ③自主活動の活発化に努める。
- 読書活動の推進
 - ①生徒の自主的な読書活動を推進する。
 - ②新聞を活用した学習活動を推進する。
 - ③学校図書館の活用を推進する。
- 開かれた学校づくりの推進
 - ①オープンスクール、公開授業など教育活動の公開を推進する。
 - ②ホームページ等を利用して迅速な情報発信を推進する。
 - ③地域・PTA・同窓会等との情報の共有や連携を円滑にするシステムを構築するとともに、地域の人材の活用を推進する。
- グローバル教育の推進
 - ①郷土の伝統・文化について理解を深める教育を推進する。
 - ②異文化理解学習を通じて共生の精神の涵養を図る。
 - ③スポーツ等を通じた国際交流を推進する。
- 学校運営体制の充実
 - ①教職員のコンプライアンス意識の高揚を図る。
 - ②危機管理態勢の徹底を図る。
 - ③学校価値の創造を推進する新規事業の創出、地域の人材づくり、国際交流等、新しい企画を推進するとともに、課題解決に向けた協働体制を確立する。

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題今後の改善方針
	①他人を思いやる優しさや豊かな人間性の育成に努める。	①心の健康調査を実施し、活用する。(保健環境)	調査結果が生徒理解・生徒指導に役立ったとする担当が80%以上であった。調査結果が生徒理解・生徒指導に役立ったとする担当が70%以上であった。調査結果が生徒理解・生徒指導に役立ったとする担当が50%以上であった。調査結果が生徒理解・生徒指導に役立ったとする担当が50%未満であった。	A B C D	①本年度は食育に関する行事との関連で当該項目に関するアンケートは実施していない。担当が面談等を利用し心の健康についてケアしている。	B	評価指標については、概ね達成できた。生徒との面談は生徒理解にとって有効であると、多くの教員が感じている。面談は生徒が気持ち安定させ、落ち着いた学校生活を送っていくうえで効果的であった。	・面談が担任だけに負担とならぬよう副担任や学年団の協力体制が必要である。 ・生徒との面談や生徒理解に役立つ職員研修会を検討する。
		②生徒との面談を実施し、生徒理解を深める。(保健環境)	面談が生徒理解・生徒指導に有効であったとする担当が80%以上であった。面談が生徒理解・生徒指導に有効であったとする担当が70%以上であった。面談が生徒理解・生徒指導に有効であったとする担当が50%以上であった。面談が生徒理解・生徒指導に有効であったとする担当が50%未満であった。	A B C D	②生徒との面談が有効であったと回答した担任割合は98.2%であった。			
		③教育相談・特別支援教育の研修を実施する。(保健環境)	研修が教育相談体制の充実に役立ったとする職員が80%以上であった。研修が教育相談体制の充実に役立ったとする職員が70%以上であった。研修が教育相談体制の充実に役立ったとする職員が50%以上であった。研修が教育相談体制の充実に役立ったとする職員が50%未満であった。	A B C D	③教育相談・特別支援教育に関する体制の充実度について大変役だった、役だったであったとの回答が84.5%であった。			
1 生徒指導の充実	②社会のルールや校則を厳守させ、規範意識の向上を図る。	①定期的に服装・頭髪検査を実施する。(生徒指導)	違反者数が0になった。全体で違反者数が10人未満になった。違反者数が前年度とほぼ同数であった。違反者数が前年度より増加した。	A B C D	①アンケートにおいては、服装や頭髪など身だしなみに関わる校則が守れていると生徒、保護者の90%が回答しているが、現状を鑑みて、指導・支援を拡充していく必要性を感じている。	B	遅刻総数は減少傾向になっている。生活習慣の乱れがトラブルにあり要因となっており、自らトラブルを回避していくような指導の拡充がさらに必要であると感じている。そして、委員会活動などが活発になり、生徒間でマナーを良くしていくこととするような雰囲気もあり、学校自体が活気づいて自浄作用がでてきている。	・平成28年度の遅刻数は、前年度より減少した。しかし、毎年10月以降急激に増加している点については改善点が必要であると考えている。さらに多遅刻者の生活態度の改善に向けて、多角的な指導と総合的な支援を実施していきたい。 ・保護者と連携した通学指導を実施し、交通マナーの向上を図ることができた。引き続き通学指導、巡視などをとおしてさらに向上をはかりたい。
		②毎日、通学指導(挨拶・身だしなみ・通学マナー)を行い遅刻者数の減少を目指す。(生徒指導)	遅刻者数が全校生の前年度の遅刻者数より10%以上減少した。遅刻者数が全校生の前年度の遅刻者数を下回った。遅刻者数が全校生の前年度の遅刻者数を上回った。遅刻者数が全校生の前年度の遅刻者数より10%以上増加した。	A B C D	②1日における遅刻者数の割合が昨年より減少した。			
		③学校の生徒指導の方針を明確に示し、教職員の共通理解を図る。(生徒指導)	教職員の指導目標に対する達成度が90%以上であった。教職員の指導目標に対する達成度が80%以上であった。教職員の指導目標に対する達成度が50%以上であった。教職員の指導目標に対する達成度が30%以上であった。	A B C D	③教職員の生徒指導の共通理解がはかれたという項目が86%であった。			
		④登校時の交通マナーの向上と、自転車マナーの順守を図る。(生徒指導)	定期的に生活委員が駐輪マナーを呼びかけ、大きく効果を上げた。定期的に生活委員が駐輪マナーを呼びかけ、効果を上げた。不定期ではあるが生活委員が駐輪マナーを呼びかけ、効果を上げた。不定期の実施となり、効果が上がらなかった。	A B C D	④毎月1回のマナーアップ活動で生活委員会が駐輪場を整理・整頓してくれているため、生徒自ら駐輪マナーを大きく向上させる効果があった。			
		⑤教職員・PTA・生活安全委員で協力し、交通安全の啓発のための安全指導・交通マナーアップキャンペーンを行う。(生徒指導)	教職員・PTA・生活安全委員で協力し、計画通りに実施することができた。定期的に実施することができた。不定期ではあるが、実施することができた。実施することができなかった。	A B C D	⑤毎学期に1回のマナーアップ活動にPTA役員、生活委員が校門指導を実施した。			
		⑥長期休業中に校外巡視を実施する。(生徒指導)	年3回以上実施し、問題行動等未然防止に成果をあげた。年2回実施した。年1回実施した。全く実施できなかった。	A B C D	⑥校外巡視を実施し、校外における生徒の実態把握につとめた。			
		⑦補導センター・警察に学期ごとに訪問し、情報交換に努める。(生徒指導)	十分意見交換ができ、生徒指導に活かすことができた。毎月訪問をし、十分な意見交換ができた。毎月訪問したが、十分な意見交換ができなかった。毎月訪問できなかった。	A B C D	⑦毎月1回の割合で警察等の関係機関に訪問し、情報を共有していた。			
③生徒理解を深め、個に応じた生徒指導に努める。	①問題行動等を起こした生徒や、良好な学校生活のできていない生徒の保護者に対する面談を実施する。(生徒指導)	保護者と共通理解を図り、生徒に対する支援に成果を上げた。保護者との共通理解は図れたが、生徒に対する支援の成果は不十分であった。保護者との共通理解は図れたが、生徒に対する支援の成果を上げられなかった。保護者との共通理解を図ることができなかった。	A B C D	①問題行動を起こした生徒に対し、保護者や関係機関と連携して対応できた。大きなトラブルにつながるような事案を未然に防げるようなこともあった。	B	家庭連絡をまめにおこなうなどし、生徒の実態を把握しながら教員間でも共有できており、大きなトラブルを未然に防ぐことができています。	・生徒の日頃の生活習慣や顔つきからトラブルにつながる傾向があり、小さな変化にも気づけるように教員間でさらに情報を共有できるような体制を構築していかなければいけない。	
	②いじめ防止等のためにアンケートを実施する。(生徒指導)	年2回以上実施し、いじめ等を未然防止に成果をあげた。年2回実施した。年1回実施した。全く実施できなかった。	A B C D	②毎学期に1回実施し、生徒の実態を把握し、大きなトラブルにつながるような事案を未然に防げるように努めている。				

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み (担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画 の実施状況	総合 評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
2 環境教育・安全教育の推進	①生命を尊重し、心身の健康と環境問題への意識の高揚をはかり、自他の安全を守る能力を育成する。	①心肺蘇生・AED訓練を実施し、応急手当の知識や技術の習得を図る。 (保健環境)	心肺蘇生・AED訓練に参加し、知識と技術を習得することができた教職員が80%以上であった。 心肺蘇生・AED訓練に参加し、知識と技術を習得することができた教職員が70%以上であった。 心肺蘇生・AED訓練に参加し、知識と技術を習得することができた教職員が50%以上であった。 心肺蘇生・AED訓練に参加し、知識と技術を習得することができた教職員が50%未満であった。	A B C D	①AEDの場所や心配蘇生法について「よく知っている、知っている」という項目合計が80.3%であった。	A	2キャンパスから統合に移行し、様々な環境整備が平行して行われる中でも昨年に比してもよりスムーズに体制が確立されてきたように感じた。中でも防災拠点としての位置づけや、地域住民との協調体制などまだまだ課題は山積しているの、引き続き高い意識を維持するためにも、校内ファシリティーの熟知などできることから行わなければならない。	・環境問題や校内安全など内容的に幅広くまた生徒数の増加と多様化を抱える学校としての強固な体制作りが望まれる。
		②健康について関心を持たせ、疾病異常の早期発見のため、健康診断の受診や事後措置の徹底を図る。 (保健環境)	健康診断受診率が100%であった。 健康診断受診率が95%以上であった。 健康診断受診率が90%以上であった。 健康診断受診率が90%未満であった。	A B C D	②健康診断受診率は99.9%であった。			
		③掲示板の充実を図る。 (保健環境)	定期的に更新され、見やすい掲示板になっている。 定期的に更新されてはいるが、やや見づらく感じる。 期限切れの案内が掲示されているのを時折見かける。 ほとんど更新されておらず、乱雑な掲示がされている。	A B C D	③掲示板の充実に関しては「とてもみやすい、みやすい」が61.7%であり普通も入れると100%である。			
		④保健だよりやホームルームでの啓発等あらゆる機会を捉えてAEDの設置場所について周知を図る。 (保健環境)	AEDの設置場所・使用方法を知っている生徒が80%以上であった。 AEDの設置場所・使用方法を知っている生徒が70%以上であった。 AEDの設置場所・使用方法を知っている生徒が50%以上であった。 AEDの設置場所・使用方法を知っている生徒が50%未満であった。	A B C D	④AEDの場所や心配蘇生法について「よく知っている、知っている」という項目合計が80.3%であった。			
	②校内美化に努め、情操豊かな学校環境づくりに努める。	①毎日の清掃や大掃除を積極的に行わせ、学習環境を自ら整えさせる。 (保健環境)	意欲的に清掃に取り組んだ生徒が80%以上であった。 意欲的に清掃に取り組んだ生徒が70%以上であった。 意欲的に清掃に取り組んだ生徒が60%以上であった。 意欲的に清掃に取り組んだ生徒が60%未満であった。	A B C D	①毎日の清掃に積極的に行っていると答えた生徒割合は87.0%であった。	A	・校内美化は日常的な清掃と部活動による活動の両面により支えられている。このことがもっと周知され凡事徹底されるように努めていくべきだと感じた。	
		②ホームルームにおいてゴミの分別に対する意識の高揚を図る。 (保健環境)	ゴミの分別ができている生徒が90%以上であった。 ゴミの分別ができている生徒が80%以上であった。 ゴミの分別ができている生徒が70%以上であった。 ゴミの分別ができている生徒が70%未満であった。	A B C D	ゴミの分別が「よくできている、できている」と回答した生徒割合が89.6%であった。			
		③ゴミ処理の意識の高揚を図る。 (保健環境)	ゴミのポイ捨てが校内のほとんどの場所で行われなくなり、余計なゴミの持込も少ない。 ゴミはほとんどゴミ箱に捨てられてはいるが、余計なゴミの持込が少々目立つ。 ゴミのポイ捨ても少々目立つし、余計なゴミの持込もやや多い。 ゴミのポイ捨てもたいへん目立ち、余計なゴミの持込もたいへん多い。	A B C D	学校内のゴミのポイ捨てや持ち込みについて、ほとんどないが20.7%、余計なゴミがある41.4%、ゴミが目立つが37.9%であった。			
	③防災・減災教育を推進し、地域防災の即戦力および将来の担い手を育成する。	①防災訓練を実施し、防災拠点としての役割を正しく認識している。 (保健環境)	全教職員の80%以上が防災体制が確立していると感じている。 全教職員の70%以上が防災体制が確立していると感じている。 全教職員の60%以上が防災体制が確立していると感じている。 防災体制が確立していると感じている教職員が60%未満であった。	A B C D	確立されていると感じた教員割合は98.3%であった。	A	・担当課員として職員の意識がまだまだ「他人まかせ」に感じられる場面も多く、数値にはあらわれていない問題をよりの確に是正する体制づくりが求められる。	
		②防災教育や防災計画を通して、防災準備(避難グッズや経路の確認)率を高める。 (保健環境)	防災準備が整った生徒が80%以上であった。 防災準備が整った生徒が70%以上であった。 防災準備が整った生徒が60%以上であった。 防災準備が整った生徒が60%未満であった。	A B C D	避難訓練などをとおして、避難経路の確認など防災意識が高まったと回答した生徒割合は80.6%であった。			

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み (担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画 の実施状況	総合 評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
3 特別活動の推進	①ホームルーム活動・生徒会活動や学校行事を活性化させ、自主性や実践的な態度を育成する。	①生徒会を中心としたあいさつ運動や清掃奉仕活動等が毎月計画的に企画・運営され、多くの生徒が活動に参加するように支援する。 (特別活動)	生徒会や専門委員会が中心となり企画運営ができ、毎月実施した。生徒会や専門委員会の一部の生徒で実施した。実施はしたが、不定期であった。実施しなかった。	Ⓐ Ⓑ Ⓒ Ⓓ	①あいさつ運動や清掃活動は毎月計画的に企画・運営することができ、積極的に参加することができた。	A	積極的な生徒会役員が多く、昨年度の学校行事の趣旨を受け継ぎつつ新しい物を取り入れようとする姿勢が見られ活発に学校行事等が企画・運営された。	・各学校行事に生徒会役員が主体となり企画・運営することができた。今後は各種専門委員会の活性化を図り、ますます生徒主体の学校行事の企画・運営ができるようにする。
		②生徒会を中心とした生徒主体の球技大会・学校祭が企画・運営されるように支援する。 (特別活動)	生徒会が中心となり、自発的に企画運営でき、各行事が円滑に行われた。生徒会が中心となり、各行事を実施できた。生徒会が中心となり企画したがあまり協力を得られず運営が円滑ではなかった。生徒会や専門委員会が機能しなかった。	Ⓐ Ⓑ Ⓒ Ⓓ	②球技大会や学校祭は、生徒会が主体となり企画・運営することができた。特に学校祭や予餞会では創意工夫が見られ画期的に実施することができた。			
		③学校行事において、個人の個性が活かせ、積極的にできるように支援する。 (特別活動)	一人一人の個性が十分に発揮された。一人一人の個性がおおむね発揮された。一部の生徒のみの活動であった。生徒の個性が発揮されず、活気が感じられなかった。	Ⓐ Ⓑ Ⓒ Ⓓ	③学校行事では積極的に参加する生徒とそうでない生徒の二極化が見られた。			
		④専門委員会活動の活性化を図るため、各専門委員会の役割を明確にし責任を果たせるように支援する。 (特別活動)	役割を自覚し、その責任を果たせた。80%以上役割は自覚し、その責任はおおむね果たせた。70%以上役割は自覚していたが、あまりその責任を果たすことができなかった。役割の自覚が十分でなく、その責任を果たせなかった。	Ⓐ Ⓑ Ⓒ Ⓓ	④専門委員会は活発に活動できた委員会とあまり活動できなかった委員会とに分かれてしまった。			
	②部活動を推進し、スポーツ活動において質の高い専門教育を行い、競技力の向上を図るとともに、スポーツ振興に寄与する人材を育成する。	①部活動の意義について理解し、計画的に実施し生徒の自主的・自発的活動を支援する。 (特別活動)	部活動の年間計画に沿って活動ができ、その目標を達成することができた。年間計画に沿った活動がほぼできたが、目標の達成には及ばなかった。年間計画通りの活動があまりできず、目標の見直しの必要性を感じた。年間計画に沿った活動ができず、各部の方針や目標を達成することができなかった。	Ⓐ Ⓑ Ⓒ Ⓓ	①各部活動の活動は計画的に実施できた部とそうでない部との二極化が出ている。各部活動とも目標達成にむけ努力している。	B	活発な活動が見られ日々目標達成に向けての努力が見られた。学校敷地内の工事が多いが各部の創意工夫で活動に影響なく行われている。	・各部活動に専門性の高い指導者の配置を実施する努力をするとともに、生徒の自主性・自発性を支援できるように指導する。
		②部活動を推進するため、関係機関との連携や、指導方法について工夫し、専門性を高め競技力の向上を図る。 (特別活動)	昨年度実績より競技力が向上した。昨年度実績とほぼ同等の競技力であった。昨年度実績よりやや競技力が低下した。昨年度実績より大幅に競技力が低下した。	Ⓐ Ⓑ Ⓒ Ⓓ	②指導方法の専門性を高める努力と指導方法の工夫も見られた。ただ、すべての部活動に専門の教員の配置が困難なため競技力の向上に支障のある部活動も一部にあった。			
	③ボランティア活動を積極的に行い、豊かな人間性を育てる。	①自分自身の生活する学校や地域社会において起こる課題の解決に対して、自分自身が自発的・主体的にその問題を解決していこうとする。 (企画総務)	ボランティア活動の意義を理解し、主体的・積極的に参加でき、継続できている。積極的ではなかったが、周りがやっていたので活動には参加した。ボランティア活動は何もしなかった。	Ⓐ Ⓑ Ⓒ	①学校の内外でのボランティア活動について広報するとともに、生徒の活動を盛り上げた。授業では講演会を通して地域社会への親しみや世界の文化の理解を進めた。	B	積極的に地域に対しボランティアをしようとする生徒がいると同時に生徒に対するアンケートでは周りがやっているの自分も行動したという受け身の生徒が50.3%と最も多かった。	・自分自身の所属する学校や地域社会に対して愛着を持ち、問題解決をしていこうという態度を生徒に持たせるために、学校行事生徒総会、清掃活動などを充実させていく。

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み (担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画 の実施状況	総合 評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策	
4 学習指導の充実	①基礎的・基本的の指導を徹底し、基礎学力の向上定着を図る。	①生徒が理解しやすいように配慮した授業をする。 (教務)	生徒の80%以上が授業が分かると感じている。 生徒の70%以上が授業が分かると感じている。 生徒の60%以上が授業が分かると感じている。 生徒の60%未満が授業が分かると感じている。	A B C D	ほとんどの科目は理解できている(24.3%)、半分くらいの科目は理解できている(60.7%)合計が85.0%であった。	B	自己の能力に応じた時間割の作成や教員の生徒の実情に合わせた指導方法・内容が実践できていると考えられる。 時間割作成において本年度は評価Aを達成することができた。また現在の時間割についても満足度が85.5%と昨年より5%以上向上した。履修モデルが生徒の適切な科目選択に繋がり、よい結果となって反映されている。	・授業、課題、資格検定において、内容の精選・指導力の向上を含めた検討を行う。また、教科の垣根を越えたカリキュラムマネジメントを行い学校として生徒の基礎学力の向上・定着を図り、進路指導に繋げる。 ・学習計画を立てず、勉強も十分できなかった生徒も多く、面談等を通じて意識の向上につなげる。履修モデルの検討を行さらに進め、生徒の個性・進路に応じた科目選択を行う。また、進路希望に応じた選択科目調整を可能な限り行い、学習の充実を図る。	
		②定期考査に向けて学習計画を立てて考査に臨ませる。 (進路指導)	学習計画を立てて、考査の勉強も十分できた生徒の割合が50%以上であった。学習計画を立てなかったが、考査の勉強は十分できた生徒の割合が50%以上であった。学習計画を立てて、考査の勉強も十分できた生徒の割合が50%未満であった。学習計画を立てなかったが、考査の勉強は十分できた生徒の割合が50%未満であった。	A B C D	75%が学習できたと回答している。				
		③始業チャイムを生徒とともに聞く。 (教務)	毎授業チャイムを教室で聞いた教員が90%以上であった。 毎授業チャイムを教室で聞いた教員が80%以上であった。 毎授業チャイムを教室で聞いた教員が70%以上であった。 毎授業チャイムを教室で聞いた教員が70%未満であった。	A B C D	毎回聞いている(19.3%)、ほとんど聞いている(61.4%)合計が80.4%であった。				
		④各教科において、資格や検定受検を積極的に薦め、指導・支援する。 (進路指導)	昨年度に比べ合格率が10%以上増加した。 昨年度に比べ合格率が0%から10%未満増加した。 昨年度と合格率が同数であった。 昨年度より合格率は下がった。	A B C D	全体的には8.4%の合格率増加がみられた。生徒への支援ができたと考える。				
	②幅広い選択科目を設定し、生徒一人一人の興味・関心・進路に応じた履修指導を推進する。	①個別の相談体制を充実させ、個々の生徒に応じた時間割の作成に努める。 (教務)	生徒の90%以上が十分な相談体制のもと時間割を作成できたと感じている。 生徒の80%以上が十分な相談体制のもと時間割を作成できたと感じている。 生徒の70%以上が十分な相談体制のもと時間割を作成できたと感じている。 生徒の70%未満が十分な相談体制のもと時間割を作成できたと感じている。	A B C D	大変よく相談に乗ってくれた(28.0%)、よく相談に乗ってくれた(63.0%)合計が91.0%であった。	A	生徒の学習においては、定期考査での反省はするが十分に学習に取り組めなかったという意見が多い。しかし、昨年度より評価指標は向上している。 教員の指導面では、育成評価システムにおける学習評価が	・生徒の時間割の満足度は高いが保護者からは厳しい意見もあった。夏休みの三者面談だけでなく、次年度の履修について保護者とも連携できる機会を設ける必要がある。	
		②生徒の個性・進路に合った科目選択をさせる。 (教務)	生徒の時間割満足度が90%以上であった。 生徒の時間割満足度が80%以上であった。 生徒の時間割満足度が70%以上であった。 生徒の時間割満足度が70%未満であった。	A B C D	大変満足している(17.3%)、満足している(68.2%)合計が、85.5%であった。				
	③生徒の学習意欲を引き出す指導体制・指導方法の工夫改善を図る。	①学習週間を設け、学習の習慣化を図り、面接を効果的に利用する。 (教務)	生徒の90%以上が学習週間・面接週間の取組が良かったと感じている。 生徒の80%以上が学習週間・面接週間の取組が良かったと感じている。 生徒の70%以上が学習週間・面接週間の取組が良かったと感じている。 生徒の70%未満が学習週間・面接週間の取組が良かったと感じている。	A B C D	学習週間の取組としては、取り組めた以上が71.7%。面接週間の振り返りでは、できた以上が74.7%であった。	B	また、3名の教員が指導方法の向上に向けた取り組みが行えなかったのが残念である。	・学習室の利用状況は低くあまり機能していない現状にある。しかし、考査前になると空き教室での自主学習者は多く、いかに学習室に誘導ができるかが課題である。また本年度は補習と同時展開していたので進路指導課と調整を図っていききたい。	
			②全員が学力向上に向けて個人目標を設定し、取り組みを推進する。 (教務)	育成評価システムにおける学習指導の評価B以上が全教員の90%以上であった。 育成評価システムにおける学習指導の評価B以上が全教員の80%以上であった。 育成評価システムにおける学習指導の評価B以上が全教員の70%以上であった。 育成評価システムにおける学習指導の評価B以上が全教員の70%以上であった。	A B C D				育成評価システムにおける学習指導の評価B以上の教員の割合は91%であった。
			③教員相互間の授業見学および研究授業を実施し、指導方法向上を目指す。 (教務)	教員の全員が指導方法向上に向けた取り組みを行った。 教員の90%以上が指導方法向上に向けた取り組みを行った。 教員の80%以上が指導方法向上に向けた取り組みを行った。 教員の80%未満が指導方法向上に向けた取り組みを行えなかった。	A B C D				教員相互間の授業参観または研究授業に参加し指導法の向上に向けた取り組みを行った教員は、94.8%であった。

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み (担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画 の実施状況	総合 評価
①基礎的・基本的の 指導を徹底し、基礎学 力の向上定着を図 る。		日々のマナトレと確認テスト後の補習や再テストの実施を徹底して行い、基礎学力の向上定着につなげる。 (1年次)	日々のマナトレと確認テスト後の補習や再テストが100%実施できた。 日々のマナトレと確認テスト後の補習や再テストの実施が80%以上100%未満であった。 日々のマナトレと確認テスト後の補習や再テストの実施が70%以上80%未満であった。 日々のマナトレと確認テスト後の補習や再テストの実施が70%未満であった。	A B C D	日々のマナトレを担当・副担任で取り組み、確認テスト後の補習や再テストを放課後に適切に行った。	B
		日々のマナトレと確認テスト後の補習や再テストの実施を徹底して行い、基礎学力の向上定着につなげる。 (2年次)	日々のマナトレと確認テスト後の補習や再テストが100%実施できた。 日々のマナトレと確認テスト後の補習や再テストの実施が80%以上100%未満であった。 日々のマナトレと確認テスト後の補習や再テストの実施が70%以上80%未満であった。 日々のマナトレと確認テスト後の補習や再テストの実施が70%未満であった。	A B C D	日々のマナトレを担当・副担任で取り組み、確認テスト後の補習や再テストを放課後に適切に行った。	
		日々の朝プリントを確実に実施し、基礎学力の定着につなげる。 (3年次)	日々の朝プリントが100%実施できた。 日々の朝プリントの実施が80%以上100%未満であった。 日々の朝プリントの実施が70%以上80%未満であった。 日々の朝プリントの実施が70%未満であった。	A B C D	プリントを作成し、1学期期間中は行ったが、2学期以降は個々の生徒に応じた指導を行う必要があり、出来なかった。	
		課題(週末課題、授業の課題プリント)提出率90%以上を目指す。 (国語科)	課題の提出率が90%以上であった。 課題の提出率が70%以上90%未満であった。 課題の提出率が50%以上70%未満であった。 課題の提出率が50%未満であった。	A B C D	単元ごとに授業内容のまとめプリントや学習帳を提出させた。その提出率は90%以上であったが、自主学習の週末課題は70%程度であった。	
		週末課題や授業の課題プリント提出率90%以上を目指す。 (数学科)	課題の提出率が90%以上であった。 課題の提出率が70%以上90%未満であった。 課題の提出率が50%以上70%未満であった。 課題の提出率が50%未満であった。	A B C D	授業の進度に応じた課題提出で、提出率は良好であり、生徒自身も提出することに関して積極的であった。	
		授業ノートの提出率および「進路実現のための勉強をしている」と実感できている生徒を増やす。 (地歴公民科)	授業ノートの提出率および進路実現に役立つと実感できる生徒が90%以上であった。 授業ノートの提出率および進路実現に役立つと実感できる生徒が80%以上であった。 授業ノートの提出率および進路実現に役立つと実感できる生徒が70%以上であった。 授業ノートの提出率および進路実現に役立つと実感できる生徒が60%以上であった。	A B C D	全体授業では教科書準拠ノートで基本語彙や内容のまとめを行い、発展的学習や時事問題については個別方式で行い進路実現を支えた。	
		ノート、ワーク、実験レポートを提出する。 (理科)	ノート、ワーク、実験レポートの提出率(チェック率)80%以上である。 ノート、ワーク、実験レポートの提出率(チェック率)70%以上である。 ノート、ワーク、実験レポートの提出率(チェック率)50%以上である。 ノート、ワーク、実験レポートの提出率(チェック率)50%未満である。	A B C D	定期考査後、提出させたり、授業中の机間巡視によりチェックを行った。全体として、問題の一部が出来ていない生徒が一部いた。	
		週末課題や授業プリント等、課された提出物の提出率100%を目指す。 (英語科)	提出率100%を達成した。 提出率90%以上であった。 提出率80%以上であった。 提出率80%未満であった。	A B C D	授業の度にワークシートを提出させ、考査では全ての提出物を確認した。大多数の生徒は提出率100%であったが、一部できない生徒がいた。	
		体づくり運動や楽しく運動することを学び、基礎体力の向上を図る。 (保健体育科)	新体力テストのA・B評価の生徒の割合が10ポイント(%)向上した。 新体力テストのA・B評価の生徒の割合が5ポイント(%)向上した。 新体力テストのA・B評価の生徒の割合が昨年と同率であった。向上率0ポイント(%) 新体力テストのA・B評価の生徒の割合がーポイント(%)だった。	A B C D	新体力テストのA・B評価の生徒の割合が男子で4.8%、女子5.4%上昇した。本年度も11月に持久走を行い、基礎体力の向上に努めた。	
		授業での提出物(レポート等)の提出率100%を目指す。 (商業科)	提出率が100%であった。 提出率が80%以上100%未満であった。 提出率が60%以上80%未満であった。 提出率が60%未満であった。	A B C D	ほぼ全員の生徒が、指示されたノート・問題集等を期限内に提出することができた。	
		授業での提出物(レポート等)の提出率100%を目指す。 (工業科)	提出率が100%であった。 提出率が80%以上100%未満であった。 提出率が60%以上80%未満であった。 提出率が60%未満であった。	A B C D	目標達成に向けた取り組みは、目標通り達成できた。今後も引き続き取り組みたい。	

所見	次年度への課題 今後の改善策
個々の能力と学校の実態に応じたマナトレのあり方を検討する必要がある。	各教科ごとに意見交換する場を設け、よりよりマナトレの実現に向け調整する。
生徒一人一人の学習到達度に応じた演習問題に取り組ませる必要がある。	1時間、1時間の授業と連動した効果的な演習ができるように工夫していきたい。
進路課と年間を通じた位置づけをもう一度調整する必要がある。	多彩な進路に対応するため、共通の課題で実施するのは難しい。進路課と調整を行いたい。
課題の単なる提出にとどまらず、いかに学習内容を定着させていくかを検討していく必要性を感じている。	週末課題をまとめて提出する傾向があり、常に継続的に学習に取り組ませ、その都度提出できるように、HR担任とも連携していきたい。
生徒自ら意欲的に提出課題に取り組もうとする意識を高めていかなければならない。	生徒に解ける喜びを感じさせ、意欲的に取り組むように導いていきたい。
授業内容が多岐にわたり生徒も時事や歴史の問題についてくることに必死ではあるが、充実感が実感できた。	講義形式だけでは集中力が続かない生徒も多く、様々な活動を通して参加型授業を確立する必要がある。
答えを受ける作業ではなく、どのように理解を進めるか検討する必要がある。	次年度以降も継続して全ての提出ができるよう指導したい。また、机間巡視中学生への助言の方法など工夫したい。
教科担任からだけの呼びかけではなく、担任とも連携し粘り強い指導が必要であると感じた。	次年度以降も継続して全ての提出ができるよう指導したい。また、期限を守らせることにも重点を置きたい。
食育の研究校として、食事と運動の大切さを学習し、実践したことは、良い意識づけとなった。	食育で学んだことを活かし、授業での取り組みを工夫することで、運動に親しむ習慣を養い、さらに体力の向上を目指す。
学習内容の定着につながる提出物のあり方を検討し直す必要がある。	指示された提出物を期限内に提出することの重要性をしっかりと理解させていきたい。
提出率は100%だが、締め切り日までの提出には課題が残った。	多くの生徒が就職するため、決められたルールの厳守等の大切さを機会を捉えて、理解させたい。

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み (担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
5 進路指導の徹底	①生徒一人ひとりの学力や適性などを的確に把握し、個に応じたきめ細やかな指導を徹底する。	①面談を通じて生徒の学力・適性・個性を把握する。 (進路指導)	面談を活用し、十分な生徒理解と、進路に対するアドバイスができた。 面談を活用し、おおむね生徒理解ができた。 面談を実施したが、満足のいく生徒理解ができなかった。 面談を実施できなかった。	A B C D	大変有効であったが53.4% 有効だったのが44.8% トータル98.2%で有効だったと考えられる。	A	生徒理解を行うには個別面談は大切で、話をを行うことにより生徒の把握及び教員の思い等も生徒に伝わるため、今後も必要性を感じている。特に3年次においては進路先と直結するので、丁寧に進める必要がある。	・支援体制で11%の生徒が支援してくれていないと感じているのできめ細かな支援体制の必要性が課題とされる。
		②進路対策会議を実施する。 (進路指導)	必要な情報を共有し、進路指導に十分活用することができた。 必要な情報を共有することはできたが、十分活用することができなかった。 必要と感じる情報を共有することができなかった。 進路対策会議を実施しなかった。	A B C D	大変役に立ったが36.8% 役に立ったが47.4% トータル84.2%で役に立ったと考えられる。			
		③生徒一人一人の進路実現に向けての支援体制を拡充する。 (進路指導)	支援体制について生徒の80%以上が満足した。 支援体制について生徒の70%以上が満足した。 支援体制について生徒の50%以上が満足した。 支援体制について生徒の50%未満しか満足しなかった。	A B C D	そう思うが49.4% 少しそう思うが39.3% トータル88.8%で役に立ったと考えられる。			
	②スポーツ科学科・総合学科の特性を考慮したキャリア教育を推進する。	①インターンシップ、大学・専門学校訪問を行い、事前事後の指導を充実させる。 (企画総務)	参加生徒の80%以上が満足した。 参加生徒の70%以上が満足した。 参加生徒の50%以上が満足した。 参加生徒の50%未満しか満足しなかった。	A B C D	インターンシップの2年次での満足度を学校評価アンケートで調査した。大変良かった44.4%良かったが41.2%であった。また今年度はインターンシップの発表会を実施し、外部でも発表し、指導の充実にも努めた。	A	インターンシップについては生徒の満足度も高く発表の機会を設けることができた。また、大学専門学校の発表の機会を設けて学校全体で学習する機会を設ける。また、外部の方や保護者にも聞いていただくことを計画する。	・12月に「産業社会と人間」総学の発表会を設け、1年次の発表の優秀者、2年次生はインターンシップ・大学訪問、3年次生は課題研究の発表の機会を設けて学校全体で学習する機会を設ける。また、外部の方や保護者にも聞いていただくことを計画する。
		②総合学科における「産社」・「総学」の内容を充実させる。 (企画総務)	生徒の80%以上が「産社」・「総学」の授業に満足した。 生徒の70%以上が「産社」・「総学」の授業に満足した。 生徒の50%以上が「産社」・「総学」の授業に満足した。 生徒の50%未満しか「産社」・「総学」の授業に満足しなかった。	A B C D	産社・総学の内容について生徒の学校評価アンケートでは大変良かったが9.0%良かったが40.3%であった。今年度は産業社会と人間・総学ともに外部講師の数が増え、充実した内容となった。			
		③総合学科における「産社」全体発表会、総学の「課題研究発表会」を充実させる。 (企画総務)	生徒の80%以上が発表会に満足した。 生徒の70%以上が発表会に満足した。 生徒の50%以上が発表会に満足した。 生徒の50%未満しか発表会に満足しなかった。	A B C D	産社の全体発表会・総学の課題研究発表会をそれぞれ学年で実施した。3年次は個人で発表し、1年次はグループ発表であった。産社では文科省をはじめとして、県教育委員会や地元の中学校など外部からも審査員に来ていただき充実した発表会となった。			
		④スポーツ科学科の進路に対して大学等を含め情報提供に努める。 (進路指導)	進路情報の提供について、スポーツ科学科生徒の80%以上が満足した。 進路情報の提供について、スポーツ科学科生徒の70%以上が満足した。 進路情報の提供について、スポーツ科学科生徒の50%以上が満足した。 進路情報の提供について、スポーツ科学科生徒の50%未満しか満足しなかった。	A B C D	大変満足した25.5% 満足したが52.2% トータル77.7%で満足したと考えられる。			
	③進路設計や進路選択に必要な情報提供を組織的・計画的に行い、生徒一人ひとりの勤労観・職業観の育成を図る。	①進路講演会、講話、ホームルーム活動を通じて生徒の職業観・勤労観に努める。 (進路指導)	進路情報の提供について、生徒の80%以上が満足した。 進路情報の提供について、生徒の70%以上が満足した。 進路情報の提供について、生徒の50%以上が満足した。 進路情報の提供について、生徒の50%未満しか満足しなかった。	A B C D	役に立ったが36.2% 少し役に立ったが52.8% トータル89.0%で役に立ったと考えられる。	B	80%以上の生徒が満足と回答していることから、十分成果が上がったと言える。しかし、役に立ったが36.2%のためもう少し来年度は上げたい。 昨年の71.4%から若干活用機会が増すことができた。	・進路のしおりを活用したHR等を実施し、しおりの利用頻度を向上させたい。
		②ホームルーム活動を含め、進路のしおりを活用する。 (進路指導)	進路のしおりを利用した生徒が80%以上であった。 進路のしおりを利用した生徒が70%以上であった。 進路のしおりを利用した生徒が50%以上であった。 進路のしおりを利用した生徒が50%未満であった。	A B C D	よく活用したが32.3% 少し活用したが40.7% トータル73.0%で活用したと考えられる。			

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み (担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画 の実施状況	総合 評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
6 人権教育推進	①学校の教育活動を通して人権尊重の教育・道徳教育を展開する。	①各教科・科目・ホームルーム活動・「産業社会と人間」「総合的な学習の時間」等全ての教育活動に人権尊重の理念を定着させる。 (人権教育)	各教科の人権教育の学習評価で、ABの合計が80%以上であった。 各教科の人権教育の学習評価で、ABの合計が70%以上であった。 各教科の人権教育の学習評価で、ABの合計が60%以上であった。 各教科の人権教育の学習評価で、ABの合計が50%以上であった。	Ⓐ Ⓑ [○] Ⓒ Ⓓ	①「産業社会と人間」の講座では、外部講師を招いての人権学習の視点を取り入れた授業展開を実施し、生徒の取り組みは良好であった。	A	各教科における学習や「産業社会と人間」「総合的な学習の時間」において、人権尊重を根拠に据えた学習指導が展開され、生徒の評価は概ね良好な結果となっている。 夏期休業中の課題にしている人権意見作文はほとんどの生徒が提出できた。そして、それを校内人権意見発表会につなげているが、発表者の人権問題に対する真摯な気持ちが聴取者に伝わり、人権意識の向上につなげることができた。	・本校の特色(スポーツ科 学科設置や防災拠点校など)を踏まえた人権教育のあり方を考える必要があると思われる。 ・生徒が自らの課題として人権問題をとらえ、主体的に取り組もうとする指導計画の充実をめざす。
		②人権学習ホームルーム活動を柱として、人権や命の大切さを根拠に捉えた人権教育や道徳教育を推進する。 (人権教育)	人権学習ホームルーム活動に満足している生徒が70%以上であった。 人権学習ホームルーム活動に満足している生徒が60%以上であった。 人権学習ホームルーム活動に満足している生徒が50%以上であった。 人権学習ホームルーム活動に満足している生徒が40%以上であった。	Ⓐ [○] Ⓑ [○] Ⓒ [○] Ⓓ	②生徒の主体性を重視した人権ホームルーム活動を目指し、各担任が指導計画の工夫に努めたことにより、生徒の評価は良好な結果が得られた。			
		③人権意見作文や研修・講演会等の感想を書くことで、人権意識の向上を目指す。 (人権教育)	全校生徒の90%以上が感想文を提出した。 全校生徒の80%以上が感想文を提出した。 全校生徒の70%以上が感想文を提出した。 全校生徒の60%以上が感想文を提出した。	Ⓐ [○] Ⓑ [○] Ⓒ [○] Ⓓ	③人権意見作文は殆どの生徒からの提出が得られた。また、人権に関する映画会・講演会では、事後の感想文で人権問題解消に向けた前向きな記述が多く見受けられた。人権意見作文は殆どの生徒が提出できた。			
	②地域や家庭と連携した人権教育を推進する。	①教職員間の人権意識向上を目指した研修会を実施する。 (人権教育)	研修後、今後の人権教育の向上に役立つと感じた教職員が80%以上であった。 研修後、今後の人権教育の向上に役立つと感じた教職員が70%以上であった。 研修後、今後の人権教育の向上に役立つと感じた教職員が60%以上であった。 研修後、今後の人権教育の向上に役立つと感じた教職員が50%以上であった。	Ⓐ [○] Ⓑ [○] Ⓒ [○] Ⓓ	①教職員研修は、「いじめ防止対策の現状と課題」をテーマに講師を招いて実施し、いじめ問題の本質と現状を正しく理解し、問題解決への認識を深める研修ができた。	B	人権に関する映画会・講演会では事後の感想文で、人権問題解消に向けた前向きな記述が多数あり、その成果がうかがわれた。	・人権に関して教職員が抱える問題意識やニーズを踏まえたテーマの設定や、外部講師の選定を実現するなかで、教職員研修の一層の充実を図る。 ・保護者への人権啓発のあり方に工夫を要する。
		②鳴門市人権文化祭や県内各種人権問題の大会や研修会に積極的に参加する。 (人権教育)	鳴人祭、各種人権大会等に参加した教職員が全体の60%以上であった。 鳴人祭、各種人権大会等に参加した教職員が全体の50%以上であった。 鳴人祭、各種人権大会等に参加した教職員が全体の40%以上であった。 鳴人祭、各種人権大会等に参加した教職員が全体の40%未満であった。	Ⓐ [○] Ⓑ [○] Ⓒ [○] Ⓓ	②各種の人権大会や行事にできる限り多数の教職員が参加できることをめざし、年度当初に参加計画をたて、ほぼ予定通り実施し成果をおさめた。			
	③自主活動の活性化に努める。	①人権委員会、人権意見発表会、校内自主活動、「人権を語る高校生の集い」等への生徒の積極的参加を促す。 (人権教育)	校内外の各種人権関係行事の生徒の参加数は、60名以上であった。 校内外の各種人権関係行事の生徒の参加数は、50名以上であった。 校内外の各種人権関係行事の生徒の参加数は、40名以上であった。 校内外の各種人権関係行事の生徒の参加数は、40名未満であった。	Ⓐ [○] Ⓑ [○] Ⓒ [○] Ⓓ	①校内人権意見発表会は、1・2年次で、すべてのクラスから発表者を得ることができ、生徒の参加状況は良好であった。「中高生による人権集会」への参加が少数にとどまった。	B	・人権委員会および社会問題研究部の活動の活性化に向けて、具体的な方策を明らかにする。	

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み (担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画 の実施状況	総合 評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策	
7 読書活動の 推進	①生徒の自主的な読書活動を推進する。	①学級文庫の利用を促進する。 (図書情報)	学級文庫を利用した生徒が50%以上であった。 学級文庫を利用した生徒が40%以上であった。 学級文庫を利用した生徒が30%以上であった。 学級文庫を利用した生徒が30%未満であった。	Ⓐ Ⓑ [○] Ⓒ Ⓓ	学級文庫を利用した生徒は44%であった。	B	図書館、学級文庫、新聞の利用については昨年よりは増えており、今後さらに利用しやすい環境を整備したい。また、図書館の利用については、図書館便りの作成などの成果が現れたものと思う。	・生徒の興味・関心を引く 図書をそろえていきたい。	
	②新聞を活用した学習活動を推進する。	①SHRやHR活動において新聞を活用する。 (図書情報)	新聞を活用したHRを行ったクラスが50%以上であった。 新聞を活用したHRを行ったクラスが40%以上であった。 新聞を活用したHRを行ったクラスが30%以上であった。 新聞を活用したHRを行ったクラスが30%未満であった。	A B C Ⓓ [○]	SHRやHRで新聞を活用したクラスは21%であった。				C
		②各授業において新聞を活用する。 (図書情報)	新聞を活用した授業を行った教員が50%以上であった。 新聞を活用した授業を行った教員が40%以上であった。 新聞を活用した授業を行った教員が30%以上であった。 新聞を活用した授業を行った教員が30%未満であった。	Ⓐ Ⓑ [○] Ⓒ Ⓓ	授業において新聞を活用した教員は40%であった。				
③学校図書館の活用を促進する。	①図書館の利用者数を増やす。 (図書情報)	図書館を利用した生徒が10%以上増えた。 図書館を利用した生徒が5%以上増えた。 図書館を利用した生徒が増えた。 図書館を利用した生徒が増えなかった。	Ⓐ [○] B C D	図書館の利用者数は前年度より19%増えていた。	A	・図書館にある図書の 広報などを行っていきたい。			

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み (担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
8 開かれた学校作りの推進	①オープンスクール、公開授業などの教育活動の公開を推進する。	①公開授業を年間3回以上実施する。 (教務・企画総務)	今年度参加者／前年度参加者の割合が150%以上であった。 今年度参加者／前年度参加者の割合が125%以上であった。 今年度参加者／前年度参加者の割合が100%以上であった。 今年度参加者／前年度参加者の割合が100%未満であった。	A B C D	①オープンスクールを含め、公開授業を3回実施した。PTA総会56名、公開授業8名、オープンスクールの参加者393名(昨年度311名)であり、増加率は126%であった。	B	体験入学は、夏季休業中に多くの中学生が、参加して盛況であった。これからも参加者が多くなるようであれば、体験入学のやり方に工夫しなければならないと思うが、多くの中学生に学校を見に来て貰えるのは嬉しいことである。11月の公開授業は平日のこともあり、保護者が参加しにくい状況であるが、県外からの参加もあったので引き続き実施していきたい。	・公開授業週間に本校教員と保護者との面談の期間を設ければ、学校の教育内容を公開するのに良い機会になるのではないかと考えるので検討していく。
		②行事案内の出欠の返信回収率を上げ、保護者に学校行事に対する関心を持ってもらう。 (企画総務)	回収率が70%以上であった。 回収率が60%以上であった。 回収率が50%以上であった。 回収率が50%未満であった。	A B C D	②PTA総会、PTA研修会の家庭連絡文書の返信回答率を調査した。返信回収率の全体の平均は60.6%であり昨年を6%ほど下回った。しかし学校評価アンケートの回答は529の保護者からいただき昨年(476名)を11%上回った。			
		③学校祭を保護者や中高生・地域の方に開放する。 (特別活動)	今年度訪問者数が300人以上であった。 今年度訪問者数が200人以上であった。 今年度訪問者数が150人以上であった。 今年度訪問者数が150人未満であった。	A B C D	③訪問者数は270名であった。新校舎になり鳴門渦潮高校としての学校祭のスタイルも確立しつつある。生徒会主体で生徒の意見も取り入れながら充実した学校祭を作っていく。			
	②ウェブサイト等を利用して迅速な情報発信をする。	①本校からのメール配信システムの保護者登録数を増やす。 (図書情報)	保護者の登録数が70%以上であった。 保護者の登録数が60%以上であった。 保護者の登録数が50%以上であった。 保護者の登録数が50%未満であった。	A B C D	①本年度よりメール配信システムが変更になり、生徒、保護者両方が登録できるようになった。登録は約83%になり、昨年より大幅に増加した。	A		
		②ウェブサイトの内容を適宜更新し、充実を図る。 (図書情報)	ウェブサイトのアクセス数が500件／月以上あった。 ウェブサイトのアクセス数が300件／月以上あった。 ウェブサイトのアクセス数が200件／月以上あった。 ウェブサイトのアクセス数が200件／月未満あった。	A B C D	②1ヶ月平均10,000を超えるアクセスがあった。			
	③地域・PTA・同窓会等との情報の共有や連携を円滑にするシステムを構築するとともに、地域の人材の活用を推進する。	①PTA活動・および学校評価をホームページを通じて広報する。 (企画総務)	PTA活動の広報を5回以上行った。 PTA情報の広報を3回以上行った。 PTA情報の広報が2回以下であった。 PTA活動の広報が行えなかった。	A B C D	①役員会・PTA活動・PTAの研修会を実施し、PTAの活動については学校のホームページにおいてその広報を行った。今年は柔道のオリンピック金メダル4連覇の野村選手の講演会とともに行い、参加者からは好評であった。	B		
②PTA総会の参加者を増加させる。 (企画総務)		参加者が生徒数の40%以上であった。 参加者が生徒数の30%以上であった。 参加者が生徒数の20%以上であった。 参加者が生徒数の20%未満であった。	A B C D	②PTA総会の参加者は56人であった。ほとんどの保護者からお返事をいただいたにもかかわらず出席者は全生徒647人に対する割合の8.7%で、目標よりもかなり少ない数字であった。				

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み (担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画 の実施状況	総合 評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
9 グ ロー バル 教 育	①郷土の自然・歴史・文化・産業について理解を深める教育を推進する。	①「産業社会と人間」を通して徳島県や鳴門市の自然・歴史・文化・産業の素晴らしさを認識させる。 (総合学科)	郷土の自然・歴史・文化・産業を誇りに思える生徒が70%以上であった。 郷土の自然・歴史・文化・産業を誇りに思える生徒が60%以上であった。 郷土の自然・歴史・文化・産業を誇りに思える生徒が50%以上であった。 郷土の自然・歴史・文化・産業を誇りに思える生徒が50%未満であった。	A B C D	①生徒は十分理解できたように思う。アンケート実施以降に開催された社社の全体発表会は素晴らしかった。	B	2月の産業社会と人間の発表会で地域企業・行政などと連携し鳴門活性化のブレゼンを行い十二分に生徒への意識付けができたと感じる。	・次年度も継続して事業を行えるよう学校体制を整えることが必要である
		②インターンシップや「総学」の時間を通じ、地元へ根付き貢献している産業・文化・歴史についての理解を深めさせる。 (総合学科)	地元の産業・企業の活躍を誇りに思える生徒が70%以上であった。 地元の産業・企業の活躍を誇りに思える生徒が60%以上であった。 地元の産業・企業の活躍を誇りに思える生徒が50%以上であった。 地元の産業・企業の活躍を誇りに思える生徒が50%未満であった。	A B C D	②生徒は十分理解できたように思う。地域と連携し、地域を支える産業を知るインターンシップは2年目で、大きな成果をあげていると感じる。			
	②異文化理解学習を通じて共生の精神の涵養を図る。	①授業等の教育活動を通して、海外の習慣や文化に触れ、日本の文化との共通点や相違点についての理解を深めさせる。 (国際交流)	世界には多様な文化があることを理解した生徒が70%以上であった。 世界には多様な文化があることを理解した生徒が60%以上であった。 世界には多様な文化があることを理解した生徒が50%以上であった。 世界には多様な文化があることを理解した生徒が50%未満であった。	A B C D	①十分理解できた生徒が約30%、少し理解できた生徒は約54%となり、大多数の生徒が多様な文化についての理解を深めることができた。	A	授業や「産業社会と人間」、「総合的な学習の時間」を通して、生徒に異文化理解の姿勢を培うことができた。また、4/25に来校した台湾水里高級商工職業学校との交流では、ある一定の満足度を得た一方で、より親密な交流を望む生徒が存在することもわかった。	・今年度は姉妹校とは異なる学校が来校し3年次生を中心に交流する機会を得た。また、野球部が台湾を訪問し、姉妹校の成徳高級中学校との親善試合を実施することができた。成徳とは隔年で訪問交流をすることが決まっており、次年度は訪問交流の予定はないが、再来年の来校をふまえて、受入体制を綿密に整えるとともに、生徒や教職員にも交流について周知意識付けを図りたい。
		②授業等の教育活動を通して、異文化を尊重し、自国の文化を誇りに思う姿勢を培う。 (国際交流)	異文化や自国の文化を尊重する姿勢を持つ生徒は70%以上であった。 異文化や自国の文化を尊重する姿勢を持つ生徒は60%以上であった。 異文化や自国の文化を尊重する姿勢を持つ生徒は50%以上であった。 異文化や自国の文化を尊重する姿勢を持つ生徒は50%未満であった。	A B C D	①外国や日本の文化を大切にしなければならぬと感じた生徒は約85%となり、教育活動全体を通じて、異文化や日本文化を尊重する精神を生徒に育てることができた。			
		③海外の学生との交流を通して、新たな世界へ興味・関心を持たせる。 (国際交流)	交流に対する満足度は70%以上であった。 交流に対する満足度は60%以上であった。 交流に対する満足度は50%以上であった。 交流に対する満足度は50%未満であった。	A B C D	③交流への満足度は少し満足した生徒も合わせると約84%、交流する機会がもう少しほしい、または交流できず満足していないという生徒は約17%であった。			
	③スポーツ等を通じた国際交流を推進する。	①競技を通して海外の学生と交流する機会を設ける。 (スポーツ科)	競技を通して国際交流に積極的に取り組んだ生徒が70%以上であった。 競技を通して国際交流に積極的に取り組んだ生徒が60%以上であった。 競技を通して国際交流に積極的に取り組んだ生徒が50%以上であった。 競技を通して国際交流に積極的に取り組んだ生徒が50%未満であった。	A B C D	①授業等の教育活動を通しての異文化理解(83.5%)に関しても、講演会の実施や姉妹校との交流などを通して理解(85.7%)が進みつつあると思われる。	A	・姉妹校締結を結んでいる台湾の成徳高級中学校と国際交流事業は、隔年で実施することになっているが、来年度もスポーツを通して国際交流に積極的に努める。	

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題今後の改善方針
10 学校運営体制の充実	①教職員のコンプライアンス意識の高揚を図る。	①学校活動の様々な機会をとらえて、効果的な研修の機会を設ける。	年間を通じて8回以上研修の機会を設けた。 年間を通して6回以上研修の機会を設けた。 年間を通して5回以上研修の機会を設けた。 年間を通して研修の機会が5回未満にとどまった。	A B C D	①外部講師を招いた研修会を7月に実施するとともに7月・11月・12月にはe-ラーニング等による研修を実施した。学期当初や職員朝礼、職員会議等、機会がある毎に年間10回以上の研修機会を設けた。	A	教職員のコンプライアンス意識の高揚については、外部講師による効果的な研修会実施により成果が見られている。	・コンプライアンス研修の充実を図り、日々の生活でのコンプライアンス意識の向上を図れるような教職員の意識や資質の向上を目指す。
		②研修の内容を精選し、受講する教職員の理解度を高める。	全教職員の80%以上が理解度が高まったと考えている。 全教職員の70%以上が理解度が高まったと考えている。 全教職員の60%以上が理解度が高まったと考えている。 理解度が高まったと考える教職員が60%未満にとどまっている。	A B C D	②96.6%の教職員が理解度が深まったと回答し、十分な研修の成果が認められる。			
	②危機管理態勢の徹底を図る。	①「報告」「連絡」「相談」の徹底を図り、全教職員に必要な情報を共有できる体制を整える。	全教職員の80%以上が、職務に関する情報が共有できていると考えている。 全教職員の70%以上が、職務に関する情報を共有できていると考えている。 全教職員の60%以上が、職務に関する情報を共有できていると考えている。 情報を共有できていると考える職員が、全体の60%未満にとどまった。	B C D	①十分または概ね共有できていると回答した教職員が79.3%となり昨年より大幅に下回った。	B	合併2年目ということから情報共有や職場内の意思疎通などでやや停滞することが見られるようになってきている。	・各課や校務分掌での連絡系統が統一されていない面があるので組織としての連絡系統を改善、整理していく。職員全体がわかりやすい組織づくりを目指す。
		②教職員間の日頃のコミュニケーションを密にするとともに、「風通しの良い職場環境作り」に留意し、創造的な意見を出しやすい環境を整える。	全教職員の80%以上が、「風通しの良い職場」であると考えている。 全教職員の70%以上が、「風通しの良い職場」であると考えている。 全教職員の60%以上が、「風通しの良い職場」であると考えている。 「風通しの良い職場」であるとする職員が、全体の60%未満にとどまった。	B C D	②79.3%の教職員が風通しの良い職場であると回答したが、昨年より下回っている。			
	③学校価値の創造を推進する新規事業の創出、地域の人材づくり、国際交流等、新しい企画を推進するとともに、課題解決に向けた協働体制を確立する。	①各校務分掌の課長を中心に、本校の教育目標を理解し、その達成に向けた運営を行う。	課長を中心に教育目標の達成を意識した運営ができた。 教育目標を意識した運営ができているが、一部不十分な点があった。 不十分な点もあるが、一部で教育目標を意識した運営ができている。 教育目標の理解が不十分で達成できないケースが目立った。	A B C D	①課長を中心に運営できたの回答が53.4%であり、昨年よりポイント上昇している。	A	国際交流や地域連携、スポーツ振興などの活動が昨年より充実してきた。また、防災拠点としての活動も定着するようになり地域と連携した活動が実践されている。地道な地域発信に努め、地域貢献ができる学校となってきた。	・年度の事業を十分に精査して各課の協力のもと、校務分掌の円滑な運営ができるよう検討する。 ・地域連携をさらに充実させるために未来創造室の活動を充実強化させる。
		②教職員が地域の教育拠点としての学校を意識した協働体制を図る。	協働体制による活動が円滑に実施され、初期の目的を達成した。 おおむね円滑に実施できたが、一部に不十分な点が見られた。 不十分な点も多々あったが、協働体制による活動を実施することができた。 協働体制による活動を実施することができなかった。	A B C D	②初期の目標を達成したが55.2%であり、昨年よりやや上昇している。			